留学生の声

塾内在籍高校・学年（派遣時）	慶應義塾女子高等学校２年
留学先高校名	The Taft School
留学期間	2014 年　9 月から　2015 年　6 月まで

どのようなことを期待して渡航しましたか？

生徒に主体性が置かれ、世界中のレベルの高い学生と切磋琢磨しながら自分にチャレンジして勉強できること、抜群の施設で行うスポーツ、そして国境という垣根を越えた友人と出会うことを期待していました。

留学を振り返って

期待を遥かに超える生活を過ごすことができたと感じています。まず勉強面では、授業の大半を占めていたディスカッションを通し、意見を発信するだけでなく、他人の意見を聞いて理解した上で反応することで初めて、自分の意見に意味が生まれ、尊重されるということを学びました。友人面では、アメリカ人だけでなく、中国や韓国といった隣国の人たちと仲良くすることもできました。様々な国の友人と付き合うことで、出身国という肩書で先入観を持つのではなく、一個人として向き合うことの大切さを知りました。これらはすべて、渡航前には得られるとも思っていなかった、留学ならではの貴重な経験でした。タフトはキャンパスが美しく、校舎や寮もすべて近接しており、物理的にも心理的にも皆とても近くて、大家族のようでした。生徒たちも皆、一度何かの機会で一緒だった人とは必ず廊下で会うと挨拶をする、フレンドリーな人たちでした。また、先生とは、食堂やジムといった教室の外でも顔を合わせることが多いからか、距離も近くいつも気にかけてくださっていました。何よりも印象的だったのは、皆が、それぞれ自分の個性を持って輝いていたことでした。スポーツができる人や、演技の上手な人、歌が上手な人、など皆が特技を披露し、それを周囲が称賛する文化がとても素敵で、私も刺激を受けました。

課外活動について

学期毎にアメリカらしいスポーツを選択しました。春学期は、留学前から挑戦したかった Crew(ボート)をやりました。過酷だと言われましたが、挑戦してみて本当に良かったと思います。当初私の目標は、一軍（６槽中上位４槽）に入ることでしたが、一人差で一軍入りを逃してしまいました。その時コーチに「頑張れば上がるチャンスはある」と言われ、気持ちを入れ替えて練習に取り組んだところ、３番ボートまで昇格することができました。シーズン早々に悔しい思いをしたからこそ、 危機感を持って毎日の練習に 100％の力を注ぎ、漕ぐことができる幸せを噛みしめました。３番ボートでは、初めて水上を飛ぶ、という感覚を味わいました。また、忘れられない思い出ができたのも Crew でした。重要なレガッタで相手と一センチくらいの差で競っていた時、最後はメンタルの戦いだと言っていた先輩の言葉を思い出すと同時に、コックスの叫び声、そして皆の背中をみて、自分は何としてでも「この人たちのために勝ちたい」と思った結果、全力以上の力がこみ上げてきて、見えない壁を超えるという経験をしました。そのレースは僅差で勝利し、メンバーたちも皆、このボートの為に頑張るしかないと思った、と言っていて、ボート部特有の強い絆を感じました。また、アドバイザーなどに心配されていた成績でしたが、この期間中に時間管理のコツを身に付け、むしろ成績は上げることが出来ました。ボート部での経験は、私の留学生活においてもとても重要なものでした。

授業について

どの授業も生徒が参加することで成り立っていたので、準備が大変な分、自分の意見を発表し、他人の意見を聞くことができ、とても興味深かったです。

US History では、毎回の授業は、宿題箇所を読んだことが前提で進められました。読んだ箇所の確認をしつつ、その当時の政策や人物の行動の正当性や現代に通じる点について議論をしました。また、Harkness Discussion という完全に生徒だけで行うディスカッションをしました。当初私は、次々と発言する生徒たちの意見を聞くことで精一杯でしたが、先生の助言の元、Harkness の前日は特に教科書を入念に読み込み、自分の論点の根拠となるような箇所をあらかじめメモする、という対策をした結果、徐々に裏付けのある、意味のある発言をできるようになりました。また、授業中に議論していく際には史実の

両側の意見を聞くことができ、日本では到底想像しえない重厚な議論が繰り広げられました。最も印象的だったのは、第二次世界大戦における原子爆弾の使用は正しかったのか、というテーマでした。私は今でも苦しんでいる方が大勢いることを知っているので、決して使ってはいけない兵器だ、と一貫して主張しました。一方、アメリカ人の生徒たちは戦争を早く終わらせるのに有効な手段だった、死者数で言えばソ連やホロコーストの方がはるかに多いと主張していて、初めて歴史とは後世による認識によって意味を成すものであることを実感しました。

Collegium Musicum はオーディション制の合計 50 名程度の合唱団でした。教会音楽から現代の音楽まで幅広いジャンルを扱い、あらゆる言語で歌いました。コレギアムは精神的に解放されるオアシスで、音楽という共通の趣味を持った友人との時間はとても心地が良く、交友関係が広がりました。さらに選抜された 12 人のキャマラータというグループにも合格し、より高度な曲にチャレンジしました。挑戦する精神を一年の初めに身に付けたおかげで、悔いなく充実した一年を送ることができたのだと思います。

サービスラーニングの授業は、 他人に奉仕されず、他人に奉仕する人になれ、というタフトのモットーを体現している授業でした。週４回の授業のうち３回はボランティアとは何か、地域貢献、教育格差、世界における貧困といったテーマについて話し合ったり、ビデオをみたりして、自分が恵まれた立場にいる人間として、今後何をすべきなのかについて考えました。残りの１回は市内の幼稚園で個別に読み書きを教えました。私は一番カリキュラムに遅れていて、アルファベットを読むことも難しい女の子を担当しました。彼女の話の端々には家庭環境の不安定さや失敗への恐れが感じられました。タフト生と全く異なる環境で育っている彼女に心を開いてもらうことは大変で、教材の使い方の工夫や読み聞かせでの問い掛けなどを続ける、自分の忍耐力が試されました。最終日に幼稚園の先生に、彼女が笑うようになった、と言われたのが感動的でした。この授業はタフトでは忘れがちな社会問題に目を向けさせてくれ、奉仕の難しさややりがいを体感するきっかけとなり、重要な教育だったと思います。

今後の派遣留学生へのアドバイス

まず、留学ができると分かった瞬間の自分の喜びの気持ちをしっかりと胸に持ち、留学を可能にしてくれる人々への感謝を絶対に忘れないことが大切です。最初の数日間はどんなに自分が下調べをしたとしても分からないことも必ずあり、辛いことや想定外のこともあると思います。しかしそこで自分がなぜ留学をしたいと思ったのかを思い出せば、絶対にめげず、前を向くことができます。辛いことがあっても、一週間後、一か月後、一年後にはそんな自分を笑っていると思えば、気が楽になります。また、周りの人も初めてボーディングスクールへ来たときの寂しさはよく覚えているので、そういった人が“How are you?”と聞いてくれた時に、 “I’m good”と強がらず、自分の気持ちを打ち明けることで楽になると思います。日本人は困ったときにそれを口に出すことがなかなかできないのですが、助けを求めることはアメリカではやる気や頑張る気持ちの表れとされるので、遠慮なくいろいろと教えてもらってください。私も本音で話ができた人とは、今でも大親友です。

そして、留学中にやりたいことを具体的にイメージすると良いと思います。他の生徒は４年かけてじっくりと経験できることを私たちは１年で全て吸収することが目標なので、一見無理そうに思えても、挑戦してみれば、案外できますし、失敗も成功も絶対に自分のためになります。

最後に、何よりも大事なのはありのままの自分でいることです。国や文化が全く違っても、自分と同じような思考を持つ人や自分の友達に似た性格の人は必ずいるので、色々な人と触れ合いながら、素敵な出会いを気長に待ってみてください。自分がやりたいことをやっていれば、自然と見つけることができます。たくさん友達を作って、人生で最高の一年を築き上げてください。

以上